

『歴史のなかの地震・噴火―過去がしめす未来―』の刊行

榎原雅治

東日本大震災から十年になる。この大震災後、日本史学界では地震などの災害をテーマにしたシンポジウムや出版などの企画が相次いだ。史料編纂所では二〇一七年度に地震研究所と協力して地震火山史料連携研究機構を設置し、近世史料をおもな対象として地震史料の収集と調査に取り組んでいる。二〇一九年度からは、教養学部の学術フロンティア講義「歴史史料と地震・火山噴火」を開講し、多数の文理学生の参加を得ている。本書はその講義内容を書籍化したものである。

日本史上の地震について解説した書籍は少なくないが、本書の特徴は、それらを年代順に取り上げるのではなく、地震の発生する仕組みごとに検討している点である。すなわち①日本海溝での太平洋プレートの沈み込みによる地震（東北地方の地震）、②南海トラフでのフィリピン海プレートの沈み込みによる地震、③日本列島上の活断層による地震（内陸地震）、④太平洋プレートとフィリピン海プレートの二つが沈み込む首都圏直下で起きる地震の四つに分けて、それぞれの地震の起こる仕組みや、歴史上の大地震の様相を記述している。そのため、巨大地震がタイプごとにどのくらい長期的な頻度で発生してきたのかを理解しやすくなっている。また九世紀と一八世紀初めの富士噴火についても、その経過を具体的に解説している。

歴史に関する記述では、煩雑にならない範囲で根拠史料を掲げて、歴史学の手法を示した。揺れや被害が具体的にどう表現されているかも紹介し、難解にならないよう留意しながら、史料のもつ生々しさを伝えられることを心がけた。コラムを多く設けたのも特徴で、地震の大きさや津波の速さのような地震学の基礎知識や、前近代の時刻表現や暦など歴史研究の前提となる事柄に簡単な解説をつけて、分野外の読者への便宜をはかっている。

執筆にあたっては、説明の過不足や簡明さについて相互に意見を忌憚なく

交換した。場合によっては加筆も行った。共著といっても往々にして分担執筆になりがちだが、本書は文字どおり歴史、地震の両分野の執筆者四人による共著となった。史料編纂所所蔵の「江戸大地震之図」「恒例関東献上使日記」を活用した研究や、地震火山史料連携研究機構での史料調査による成果も取り入れているので、ご一読いただきたい。

主要目次

はじめに―過去の地震・噴火を読み解く―

一章 東北の地震

東日本大震災の地震と津波／平安前期の火山噴火と地震／三陸地方の歴史地震

二章 南海トラフの地震

南海トラフの巨大地震―その繰り返しの歴史を概観する／古代・中世の南海トラフの地震／宝永の地震と富士山噴火／安政の地震／地震発生の長期予測と被害予測

三章 連動する内陸地震

四章 首都圏の地震

熊本地震と兵庫県南部地震／天正地震／文禄畿内地震／文禄豊後地震

五章 歴史地震研究の歩みとこれから

関東地方の地震のタイプと大正関東地震／中世の相模トラフの地震／元禄関東地震／安政江戸地震／関東地震の繰り返しと長期評価



(加納靖之・杉森玲子・榎原雅治・佐竹健治『歴史のなかの地震・噴火―過去がしめす未来―』東京大学出版会、2021年3月、2,600円＋税)